

とにかく全體の語數は此の如く大した數に上つて居る。

解題は右に止めて、更に少しく此の書の價值について記して見やう、此の書の生命は勿論回語即ちチャガタイ語を收めて居るといふ點にある、此の語はいふ迄もなく清領土耳其斯坦の言語であるが、古代土耳其の言葉を最も正しく今日に傳へて居るものであつて、従がつて眞正の土耳其語なるものゝ研究は、此の地方のものを對照とすべきである、西方オスマン土耳其の言葉などは、既に能く知られて、立派な字書も數多く出來て居るが、その國語は人種、文化とともに著しく純粹の程度を失つて居るのである。然るに清領土耳其の地方は交通の不便、或は其の人種が今日世界の舞臺の上に重い役目を持つて居ないと云ふ様な點から、一向その研究は世の注意を惹かず、僅かに前にはクラプロート氏近くは露西亞のラドロフ教授の如き人が、熱心に之が研究に従事した位のものであつた。今日では歐洲の諸國に此の方面の學者が輩出して居るけれども、尙ほ出來上つて居る書物のみでは研究上甚だ不完全を感ずるのである、此の際、かく多數に其の語を收めた本書の世に出でたのは、學者にとつて確かに一大福音であつて、過去に於いて此れに比肩する様なチャガタイ語の字書は、何處の國でもあるとは思はれない。

次には一々の土耳其語に發音を附してあることが、また甚だ重要な點である、土耳其語ばかりではない、すべてアラビア字を用ゐて居る諸國では、言語を文字で示す時に其の母音を省略して、子音の文字丈を記するのが常であるからして、外國人には何と發音してよいのか解らないのである、然るに此の書によれば一々滿洲字で明らかに其の音を示してあるからして、少しも疑がふ所はないのである。

第三には唯だ土耳其語の字書といふのではなく、他の四國語と對照してあることが甚だ價值の存する所である、